

ISSG- 1(仮)

茨木翡翠

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

織斑一夏は優秀な姉と兄に比べられていた。

ある日第二回モンド・グロツソで誘拐され、救出に来たラウラと共にどこかの研究施
設に連れていかれ、壺に封印されていたゴアワルドと共に共生し、ラウラと共にステーゲイ
トでもう1つの地球へ向かつた。

目

次

プロローグ 1

プロローグ 2

プロローグ 3

設定

21 17 11 5 1

第
1
話

プロローグ1

織斑一夏、彼は優秀な姉と兄がおり、周りからは「出来そこない」「織斑の恥さらし」など言われ比べられ兄と兄のいじめ仲間からはストレス発散の道具にされたり、やつてない罪を擦り付けられていた。

さらに「インフィニット・ストラトス」通称IS の存在で姉が第1回モンド・グロツソで優勝したため、いじめがひどくなつた。ある日、誘拐されたことで彼の人生は変わつた。

一夏 side

第二回モンド・グロツソで姉の応援で兄弟揃つて応援に行き、2人の男に誘拐されそうになり兄が僕の腹を蹴つて自分だけ逃げ、僕は男達に捕まり意識が消えた。目が覚めるとどこかの廃工場で手足が縛られ身動きができなかつた。

「お前は織斑朝秋か？」

「いや、僕は織斑……一夏」

僕は誘拐犯が聞いてきたので答えた。

「出来そこないの方を連れてきたね」

「だから言つたのにこんな男達に頼むのはよそと
「何が・・目的で・・僕を」

聞くと

「織斑千冬の試合の不戦敗が目的だ」

と言つて誘拐犯がテレビを付け、第二回モンド・グロツソの試合の状況を確認すると
そこには試合に出ている姉がいた。

「何で・・・・」

「やはり出来そこないじゃ駄目か」

「用はないから殺しましようか?」

「いや、我々が発掘した古代人の武器の実験体として使える」

と誘拐犯が話しているといきなり壁が破壊され、ISに乗つた銀髪の少女が現れ
た。

??? side

私の名前はラウラ・ボーデヴィッヒ、IS 配備特殊部隊「シユヴァルツエ・ハーゼ」
の隊長で、遺伝子強化試験体として生み出された。

しかし能力が制御出来なく部隊のみんなから「出来そこない」と言われ続けた。
そしてある日教官の弟が誘拐されたと無線を傍受した。

(1人で助けに行けば部隊のみんなから認めてもらえる)
と私は単独で動いた。

「確かにこの廃工場から生命反応が・・・よし!行くぞ」
と I S を降下し、そのまま壁にレールカノンを発射し工場内に潜入した。
ドオオオオ

「「ギヤアアアア」「」

「織斑一夏、君を救助に来た」

「えつ・・・・・君は?」

「I S 特殊部隊「シユヴァルツエ・ハーゼ」のラウラ・ボーデヴィッツヒだ」

「あのドイツの特殊部隊の I S が来るなんて聞いてないよ」

「大丈夫そのために彼女達に来てもらつた。お願いします」

誘拐犯の1人が言うと I S を展開した女性が二人現れ、私に襲い掛かつた。

「くつ」

「ドイツの特殊部隊が聞いて呆れる。」

「いくよー」

がしゃああん

「うわああ」

私は、2人の猛攻に耐えきれずに壁に激突しISが解除し意識を失った。

一夏 side

僕を助けに来た彼女がやられ、誘拐犯が僕に近づき

「悪いがまた寝てもらう」

「えつ・・うぐっ」

僕の口にハンカチを付けられ、僕は意識を失い目が覚めるとどこかの研究施設の巨大なリングの前にいた・・・

プロローグ2に続く

プロローグ2

どこかの研究施設の巨大なリングの前にいた・・・

一夏 side

目が覚めるとどこかの研究施設の巨大なリングの前にいて何か焦げた様な匂いが僕の近くから匂っていた

「うつ・・・ここはどこ?」

「ここは我々、亡国機業が発掘した古代人もしくはエイリアンの遺産を調べる研究所のドイツ支部だ。もし武器ならそこで死んでいるモルモットに試し撃ちをしている」

「そこで死んでい・・・ひつ」

そこにはエネルギー武器で頭が潰れている死体や腹を貫いた痕の死体が転がっていた。

「どうしてこんなことを・・・」

「どうしてって誘拐し見捨てられた人をどう使うかは私の勝手だ」

「酷すぎる」

「悪いが次はお前の番だ」

と言われ僕は死体を見てまだ生きたかつたなあ・・・・と思つた瞬間
(生きたいか?)

「え・・・・・?」

??? side

(ここは・・・ そういえば仲間と共にラ一裏切り、壺に封印されたはずだ・・・ん?あれ
は?)

目が覚めると壺のひびの隙間から何かが見え聞こえた。

「どうしてもこんなことを・・・」

「どうしてつて誘拐し見捨てられた人をどう使うかは私の勝手だ」

(話を聞く限り悪者はあの白衣のやつか?ならあの少年に念話してみるか)
そして私は、少年に念話で聞いた。

(生きたいか?)

一夏 side

(生きたいか?)

突如第三者の声が聞こえた。

「え・・・・・?」

キヨロキヨロと周りを見るが第三者は見当たらず再び声が聞こえた。

(我の名はラリク、テーブルの上に上がっている壺の中にいる。貴方は生きたい?生きたいなら我と共生してくれないか?)

僕は少し考えてから

「死たくない。生きれるなら共生やら何だつてする!」

(了承した。合図をしたらテーブルまで行き、我が入っている壺を壊すのだ・・・今だ

!)

合図が出たので研究員を飛ばして、テーブルまで走り壺を割った。

そこから蛇の様な虫が出てきた。

(ありがとうございます・やつと出てこれた。少し痛いが我慢してくれ)

と言うと彼女は首の後ろに行き、僕の体内に入つた。
するとすぐに首の後ろの傷がふさがつた。

『体を借りた』

ラリク side

私は一夏の体を借り、すぐに石棺の上に上がつていたハンドリボンとエネルギーガンを装備し、研究員に向けてエネルギーガンを手足に撃つた。

撃たれた研究員はあまりの激痛で声にもならない悲鳴をあげこう言つた

「あがあああ・許してくれ」

『そう言つて貴様は止めていたか?。これはこれまで苦痛で死んでいつた奴らの分だ』

バチツ

「やめ・・・」

バアン

グチャヤ

研究員の頭にエネルギー・ガンをつけ、撃ち殺し、周りには潰れたザクロみたいに散らばつた。

すると、音に気づいたのか I S を展開した人が5人現れた。

『厄介な奴らが現れましたか・・・ならザット・ガンで氣絶させるか』

カチツウインデュウウン

兵A 「ギヤアアア」バタツ

兵B 「撃てえ」

C D E 「イエツサー」

気絶されられたAを見て、Bの合図で撃ち始めたが、ハンドリボンでシールドをつくり防ぎつつザット・ガンで気絶させた。

バチバチ

C 「なんで当たらない。」

E 「とにかく撃ちまくらないと」

デュウウン

D 「ギヤアアア」 バタツ

デュウウン

B・E 「ああああ」 バタツバタツ

C 「もう無理逃げるんだよー」

『逃がさない』

デュウウン

C 「ギヤアアア」 バタツ

私は I S を展開した兵士を全員気絶させてから倒れているラウラに近づき、容態を確認したら危険な状態だつたので余儀なく石棺に入れ、傷を癒している間準備をした。

石棺が開き、私は一夏に意識を返した。

「ラウラさん、ごめんなさい・・・僕のせいで怪我を負わせて」

「お兄ちゃん誰?」

「僕は一夏、君が助けに来てくれたのだけど覚えてる?」

???

石棺で傷を癒すことには成功したが、何かが原因で記憶喪失にしてしまった。

「まったく覚えてないどうしよう？」

（元ならそのまま帰つてもらうと思つたが……この際置いてきぼりも可哀想だから連れて行くか……）

「ラウラ、これは危険なところに行くかもしないけど一緒にいく？」

「うん！お兄ちゃんと一緒にいく」

「わかった」

僕は、ラリクに意識を貸しアヌビスの犬の面とエネルギー・ガン、ハンドリボン、ザツトガンを装備しラウラを連れて、ゲイトでもう1つの地球へ向かつた。

プロローグ3に続く

プロローグ3

一夏とラウラがゲイトをくぐる数分前のもう1つの地球

??? side

私はジョージ・ハモンド合衆国空軍少将、このSG—C（スター・ゲイト基地）の司令官をしている。

惑星P3-W451の状況を知るためにゲイトを接続したところ、シャットダウンできくなり、アイリスを閉鎖したがアイリスが壊れてしまつた。

今、作業員にアイリスの修理をさせている。

「ハリマン曹長、アイリスの修復状況は？」

「將軍、アイリスは・・・」

ウイーンガチヤン

ビィービィー

突如、ゲイトのダイヤル音と警告が鳴つた。

「予想外のトラベラー接近」

「アイリスの状況は？」

「将军、アイリスはまだ完全に直つてません」

「SG」——1と戦闘員はゲイトの前に集合し防衛体制とれ!

ゲイトルームの扉が開き武装した兵達がゲイトルームに集まり、武器を構えた。その

直後

ウイーンボオオオンシユツ

ゲイトが開き、ゲイトから銀髪の少女と手を繋いでいるゴアウルドの犬の面を着けた少年？が出てきた。

ラリク（一夏）、ラウラ Side

我は、ラウラと手を繋いで、ゲイトをくぐるとそこには武装して武器を構えている兵がいた。

『我的名はラリク、こちらの司令官に聞きたいことがある。』

「私がここに司令官のジョージハモンド将軍だ聞きたいこととば？」

我也共に戦いたい

『ん？ 貴方は？』

「ジャツク・オニール大佐だ、あんたが言うラーはとつくに私が船ごとぶつ飛ばした。」

『貴方が偽りの神を倒したと言うのか』

「ああ惑星アビドースで惑星探査ついでにな・・・」

『そうかなら仕方ない・・・・すまんが一夏変わつてくれ』

(えつ)

「もうまだ宿主になつて数分なのに・・・・・初めまして僕は一夏です」

「初めまして私はジャック・オニール大佐ところで一夏くん、そこで泣いている銀髪の少女は?」

僕は、指を指着している方角を見ると震えて泣いているラウラがいた。

「ラウラ、ごめんラリクと僕が話ををしていて構つてられなくて。飴あげるから機嫌直して」

「うう・・・・うん」

「えらいえらい」

と言つて僕は、ラウラの頭を撫でた。

するとラウラが猫みたいに目を細めて、気持ちよさそうな顔をしていた。

それを見ていた人達は（何かゴアウルドの面が着いているのに、あの少女のおかげで癪される）と思っていた。

オニールさんがいきなり

「ところで一夏くん、そろそろ鎧と武器を外してもらつていいかい?」「あっすいません。」

言われた僕は、自分の武装を解除した。

解除した僕の姿を見てオニールさんがいきなり
「あんた女か?」

「僕は、男です。」

「一夏くんまずは、一緒にブリーフィングルームに来てもらおうそこで話を」「わかりましたハモンド将軍、ラウラおいで」

「待つてお兄ちゃん」

そしてブリーフィングルームに入つた後、僕は、再び自己紹介と、宿主になつたを話した。

「じゃあ、一夏くん、ラウラはそんなに精神が子供みたいなんだ」

「それは…『それに関しては我が話そう、一夏を助け出そうとしてやられてしまつたラウラの健康状態を見たらかなり危険な状態だつた。仕方なく石棺を使つた。』

「おいおい、石棺を使つただつて!どうなるかわかつているだろ。」

『ああ、傷とか癒されるが副作用で心を傲慢にするぐらいだが、仕方なかつた。しかし石棺に問題が起き、癒し終わつたら記憶まで消してしまつた。』

「じゃあ彼女は自分が誰かもわからないことなの？」

『だが・・』あんまりラリクをいじめないで僕が誘拐されなきやラウラも記憶喪失にならなかつた

「お兄ちやん大丈夫?」

「ラウラ、ごめんなさい僕のせいだ」

「大佐どうしましよう・・・彼らを帰すと言つてもダイヤルもわからないですし」

「ああ将軍？ 提案ですが」

「大佐、言つてみろ」

「（）に住まわせるというのは、どうでしょ？」

「本来は、民間人を基地に住まわせるのは、許可しないが今回は事情が、事情だから許可する。」

將軍

「ただし、面倒と教育はSG——1に担当してもらう」

「「「了解です」」

それから僕とラウラは、オニール大佐の養子になり、マスター・ブレイタクに弟子入りしたり、レプリケイターから地球を救つたり、SG-1のみんなでアポフィスを

倒したりと2年間いろいろな経験をした。

今は、僕と、お父さん、将軍で次の任務で行く星について、ブリーフィングをしていた。

「大佐、次行く星は？」

「えー、次はP02S553です。」

「お父さん、今回は僕、ラウラも参加させてください」

「一夏、そのつもりだ」

その後、SG—1のみんなとラウラと行く準備し、ゲイトの前にいた。

「シェブロン7ロック ゲイト接続」

ウイーンボオオオンシユツ

「さあ行くぞ」

とスタートゲイトをくぐった。

設定

イチカ・オニール（旧織斑一夏）

容姿：パズドラのバテスト神に耳と尻尾がついていない感じの男の娘
性格：誰にも優しく、信頼している人には猫のように懐く。

優秀な姉：千冬と優秀な兄：朝秋がおり、周りからは「出来そこない」「織斑の恥さらし」など言われ比べられ兄と兄のいじめ仲間からはストレス発散の道具にされたり、やつてない罪を擦り付けられていた。

さらに「インフィニット・ストラトス」通称IS の存在で姉が第1回モンド・グロツソで優勝したため、いじめがひどくなった。

ある日、誘拐され見捨てられたのち助けに来たラウラとドイツの研究所に連れて行かれ、殺されかけた所にラリクに声をかけられ共生をした。

殺そうとした研究員を殺し、駆けつけた兵を気絶させて準備をしてから、ラウラと共にスター・ゲイトをくぐりもう1つの地球に向かい、誤解が解けた後オニール大佐の養子になつた。

養子になつた後は、オニール大佐から銃の使い方とアウトドア、サマンサ・カーター少佐から論理物理学、ダニエル・ジャクソン博士から考古学と言語学、ティルクとマスター・ブレイタクから武術を学び、たくさんの惑星をSG-1と共に冒険をした。

ラリク

元ラーの臣下のアヌビスの配下でたびたびそのラーの暴虐さを目の当たりにし裏切つた。

しかし捕まり宿主だけ殺され、寄生体は壺に封印された。

目覚めると、殺されようとしてた一夏を見て、念話で話しかけ共生した。

ラウラ・オニール（旧ラウラ・ボーデヴィッヒ）

本作のヒロイン

元I.S.配備特殊部隊「シュヴァルツエ・ハーゼ」の隊長で、遺伝子強化試験体として生み出された。

しかし能力が制御出来なく部隊のみんなから「出来そこない」と言われ続けたため、教官であつた織斑千冬に認めてもらおうと単独で一夏を助け出そうしやられてしまつた。

そのため怪我がひどかつたので一夏（ラリク）が石棺に入れ傷を癒した所、石棺に問題があり記憶を失つた。

その後、一夏のことを見と想い懐いている。

ゲイトを一夏とくぐりもう1つの地球に向かい、一夏と共にオニール大佐の養子になりました、SG—C のアイドル的存在になつた。

簾ノ之簾

一夏の幼なじみ1号で小学生の時、朝秋にいじめられた時に一夏に助けられ、一目惚れをした。

一夏が行方不明になつたと知つて、見捨てた千冬と朝秋を恨んでいる。

鳳鈴音

一夏の幼なじみ2号で簾と入れ違いで転校してきた。

朝秋に人種差別や「リンリン」と言われいじめられて、一夏に助けられ、友達になり一夏が行方不明になつて朝秋やいじめ仲間のいじめが多くなり、不登校になつて転校することになつた。

織斑朝秋

容姿：原作の一夏

オリキヤラ。一夏の兄で、天才で千冬、東以外の人を見下し、自分の思い通りにならない人に対しては、嘘の噂を流し、自分の手を汚さずに周りを利用していじめていた。

また、弟の一夏に対しては、いじめ仲間とストレス発散の道具にしたり、一夏がやつてない罪を擦り付けていた。

一夏がいなくなつてからは、相手のパソコンにハッキングして脅して、金を稼いでいた。

朝秋のいじめ仲間

黒花響

朝秋の事が、好きで朝秋と一緒に一夏や、箒、鈴をいじめていた。

朝秋に認めてもらおうと、フードを被り一夏の腹にナイフを刺した事もある。

茨木奈々

朝秋より響が好き、最初はいじめに罪悪感があつたが、響といられるという欲求に負けて朝秋のいじめ仲間になつた。

その他のキャラは後ほど追加していきます。

第1話

一夏達SG — 1 がゲイトをくぐる前

???
side

私は、織斑千冬、2年前のモンド・グロツソの試合が試合が終わつた後に一夏の誘拐を知り、廃工場に向かつた。

しかし一夏は、いなかつたが中は何かと争つたのか天井や壁が崩れていた。

その後、クラリツサから聞いた話ではラウラが単独で一夏を助けに行つた事が、分かりGPSでラウラのISが最後にいた所が判明しドイツ軍と救出に向かつた。

そこは、ドイツのパソコンショップだつたが中には、一夏、ラウラの姿は発見されず、複数の死体、研究員の死体、気絶している誘拐犯、そして巨大な輪がありつた。

科学者はその巨大な輪を調べエネルギーが帯びているからエネルギーーリングとか言つたでそのエネルギーーリングはIS 学園のエネルギーとしてIS の格納庫に設置した。

去年に弟の朝秋が女しか起動できないIS を起動させた。

そして現在

「山田先生エネルギーリングの具合はどうですか？」

「先輩、エネルギーリングには異常はありません」

何故、今エネルギーリングの前にいるというと1時間前突如、IS 学園の電力が低下し、それを確認しに私と山田先生と数名の教師を連れて格納庫に行つたからだ。

「こつちのコードは異常なし」

「こちらのコードも異常ありません」

「先輩、異常ありませんが、このままでは……」

その時

ウイイイイインガチャン ウイイイイインガチャン

突如エネルギーリングが、動き始めた。

「エネルギーリングが、動き始めた。しかし何故いきなり」

「先輩、学園内の電力がエネルギーリングに吸収されています。」

ウイイイイインガチャン

「6つ目のライトが付いた。一体何が起きているんだ」

ウイイイイインガチャン・・・ウイインボオオオオオンシユツ

「なつ」

「先輩、こんな異常初めてです。」

ズボツズボツズボツ

その時、エネルギー・リングの輪の中の波から人が出てきた。

「貴様ら何者だ？」

一夏 S i d e

「貴様ら何者だ？」

「私は、合衆国空軍のジャック・オニール大佐だ。こちらはサマンサ・カーター少佐」「はじめまして」

「こちらは、ダニエル・ジャクソン博士」

「どうも」

「テイルク」

۱۰

「義理の娘のラウラ」

—よろしくお姉ちゃん—

「義理の息子の・・」

「一夏なのか？」

「えっ？」

黒いスーツの女性が、名前を呼び、僕は、すぐにわかつた。

「千冬姉？」

「一夏あ今まで2年間どこにいたんだ」

『それに関しては我が話そう』

「一夏？」

『私はラリク。一夏と共生している。今、宿主の一夏は動搖している。』

その後、今までの経緯を説明した。

「今までそんな事が・・・信じられん」

「確かに信じられません。宇宙に、他の生物がいるなんて」

「私が、信じられるのは誘拐の時、自分で逃げるなんて・・・後で問いただしてみるか」

「ああ・・・千冬さん今更ながら、ここはどこだい？」

「ここは、IS 学園のIS の格納庫だ」

「IS ？」

「ジャクソン博士、おそらくラウラが持っていた機械だ」

「ああ・・・千冬さん、そのIS に触れても？」

「許可しよう。」

許可ので、SG-1のメンバーと僕は、ISに触れた。突如、ISが光ると頭に情報が入り、触れた全員が、装着していた。

「わお」

「また男が・・・」

「すぐに理事長に知らせろ……はあ」

何故か千冬姉は、ため息を吐き頭を抱えていた。